時間と他者 ―― レヴィナスと波多野の比較考察

山口　尚

序

時間とは何か。

これは古来の問題であり、さまざまな人間によってさまざまな仕方で取り組まれている。例えばニュートンは『プリンキピア』において「絶対的な、真の、数学的な時間」を「外界の何ものとも関係なく、均一に流れ」るものとして規定した[1]。またカントは時間を人間の認識における「直観の形式」と捉え、さらにハイデガーは現存在の存在――すなわち慮（ゾルゲ）――の意味として時間性を位置づけた。たったひとつしかない、唯一的な「時間」なるものに対して、与えられる定式化は哲学者においてさまざまに異なっている。

では、はたして彼らのうちで誰かが正しく、誰かが間違っているのであろうか。あるいは、時間の完全な定式化はいまだ誰によっても与えられておらず、彼らすべてが間違っているのであろうか。

否、おそらく実情は、次の通りであると思われる。時間という現象は異なる複数の観点から様々な語彙によって表現され、定式化されうる。そのつどの観点によって与えられる定式化も異なる。ときに間違った規定も現れ、ときに優劣のつくケースもありうるが、唯一の真正・完璧な定式化なるものは存在しない。

したがって、時間現象を「他者」あるいは「他者性」という言葉を用いて論述する、私の論稿における試みも、時間にひとつの解明を与えるものとして、一定の意義を持つことと考えられる。

時間を「他者」という語彙を用いて語ること――本稿ではこのことが為される。ただし実際のところ、こうした試みはすでに行われている（実際の時系列に従えば、すでになされた試みを知った後に私は本稿のテーマを決定した）。エマニュエル・レヴィナスと波多野精一という日仏の哲学者が、それぞれ独立に、こうした試みを為し、しかも多くの共通の帰結を導き出していることは興味深いことと思われる。レヴィナスの他者論――とくに『実存から実存者へ』と『時間と他者』という最初期の著作における他者論――は「時間」概念に論及する。そして、波多野の時間論――『時と永遠』において展開された時間論――では「他者」概念が重要な役割を果たす。本稿において為されることは、今上げた著書における彼らの思想の紹介および比較である。それによって、時間と他者性との間の無視できない連関、あるいはまた、この連関の無視できなさを強調できれば、と考えている。

ところで、時間と他者という並列は読者にとって馴染みの深いものであろうか。ひょっとすると奇妙に映っているかもしれない。並列の一方の項には、現在と過去と未来とをもち、当たり前のように存在し、つかみどころのない何かである「時間」があり、もう一方の項には、私という自己あるいは主体に対し、これもまた当たり前のように、しかしつかみどころのない仕方で現れてくる「他者」がある。これらの二項は本当に連関するのであろうか。また、連関するとすればどのように関わり合うのであろう。こうした問いを手引きに、以下、レヴィナスと波多野の議論を概観しよう。

1

まず哲学者としての波多野の議論から始めよう。

その前に、学者としての波多野の略歴を記しておきたい。波多野は一九〇〇（明治三三）年、満二三歳の年に東京専門学校（現早稲田大学）講師を嘱託し、哲学哲学史を講義した。彼の早稲田時代は一九一七（大正六）年の四〇歳まで続いた。一九一七年の九月に――夏から大学が荒れていたことを理由に――波多野は早稲田を去り、京都大学へ移る。波多野の京大時代はこの年から一九三七（昭和一二）年、つまり六〇歳になるまでである。五八歳のときに『宗教哲学』を公刊し、自身の哲学的な立場を世に問う。この著書には波多野の哲学的立場を総括する「高次の実在主義（hoeherer Realismus）」（言葉自体はシュライエルマッハーに由来）という表現が登場する。神――波多野の概念においては「高次の他者」「全く他なるもの」「絶対的他者」（IV S.211）――がこの著書のテーマである。そして『宗教哲学』の最終節「時と永遠」を深化し展開することによって成立したのが一九四三（昭和一八）年、波多野が六六歳のときに出版された『時と永遠』である。

本稿ではこの『時と永遠』を扱う。この著書の目標は「「永遠性」はその本質に於て何を意味するか、又時間性といかに連関しいかに相違するか」（IV, 260）[2]といったいわゆる「時と永遠の問題」（IV, 281）の解決である。そこにおいては時間[3]という現象がさまざまな観点から論じられる。本稿においては、その最も基礎的な箇所しか扱うことができないが、しかしながらこの基礎的な箇所こそが波多野の時間論を独特で、卓越したものたらしめていると私は考えている。

あらかじめポイントを絞っておきたい。以下の論述は時間の流れる向きという問題を念頭に読まれたいと思う[4]。時間とは、一般に、過去から現在を経て未来へと流れていくものと考えられがちである。しかしながら波多野における時間は違う。では、どのようになっているのであろうか。イメージを先どりするために詩をひとつ紹介しよう。

夜　時間の川は　永遠の
未来であるその源泉から
流れ……[5]

ここでは時間が未来から現在へと流れ込んでくるように詠われている。これが波多野の提示する「根源的体験の世界」（IV, 284）における時間のあり方の一側面である。こうした独特かつ独自な連関の定式化を目指して、以下、波多野の時間現象の記述を再構成しよう。

まず、波多野は言う、「吾々は、［すなわち］主体は、「現在」において生きる。現に生きる即ち実在する主体にとつては「現在」と真実の存在とは同義語である」（IV, 285 角括弧内の補足は引用者）。このように時間記述の出発点は「現在」である。とにもかくにも私たちは存在しており、さらに言えば現在に存在している。

とはいえ、すぐに疑問が生じる。私たちは現在にのみ存在するのであろうか。在るものは在る――このように固定した・硬直した時間の中に私たちは存在するのであろうか。このような疑問に対して波多野は言う、「若し人がややもすれば考へ易い如く多くの学者が事実考へた如く、現在が延長をも内部構造をも欠く一個の点に過ぎぬのならば、この帰結は避け難いであらう」（IV, 285）。もちろん「この帰結」とは、私たちが現在にのみ存在しているという不条理な考えである。

しかしながら、現在は――波多野にとって――単純な一個の点のようなものではない。少し長くなるが波多野自身の言葉を引いてみよう。

「現在は決して単純なる点に等しきものではなく、一定の延長を有し又一定の内部構造を具へてゐる。体験においては、時は一方現在に存するともいひ得るが、しかも他方において、その現在は過去と将来とを欠くべからざる契機として己のうちに包含する。現在は絶え間なく来り、絶え間なく去る。[以下、「将来」と「過去」という時間の構造契機の説明ですが] 来るは「将来」よりであり、去るは「過去」へである。将に来らんとするものが来れば即ち存在に達すればそれは現在であるが、その現在は成立するや否や直ちに非存在へと過ぎ去り行く。この絶え間無き流動推移が時である」(IV, 285-286)

つまり、時間――波多野の言葉では時(とき)――は、単純な一個の点ではなく、現在－将来－過去といった内的な契機を備えた流動的構造なのである。

それでは次に問題となるのが、これら三契機の関係である。現在、将来、過去はどのような仕方で連関しているのか。波多野はまず「過去」を論じることから始める。さて、波多野の時間論において「過去」とはどのようなものであろうか。

波多野は、まず、過去の本質を「去ること」と規定したうえで、では過去は「いづこへ」去るかと問い、これに対して「無」または「非存在」へと答える。つまり波多野の考えでは、現在が非存在へと去ることが「過去」の本質である。しかしながら、こうした考えは次のような疑問を生む。つまり「過去即ち既に有ったものを単純に非存在への移行と同一視することには力強き反対が起こるであらう」(IV, 286)。実際、過去は非存在へと完全に移行するわけではないように思われる。例えば次のように言える――過去の出来事は私たちの記憶のうちに留まり、過ぎ去った後も私たちに影響を与え続ける、と。しかしながら、こうした考えに波多野は反論する。「しかしながら […] 回想の内容として主体の前に置かれるのは、実は反省によって客体化されたる何ものかであつて、それの有り方は過去でなく現在なのである」(IV, 287)。言ってみれば、記憶に残る過去は偽装された現在であり、真の過去はまさしく非存在へ、まさしく無へと至っており、それはまさに無いもの・無なのである、と。

この点は強調されなければならない。というのも、こうした考え方は波多野の「将来」概念の理解にも関連しているからである。さらに注意すれば、波多野において、「将来」という概念は「未来」という概念から区別される[6]。将に来たらんとする「将来」は、未だ来たらざるものである「未来」とは異なるというわけである。こうした点を念頭に置いて、波多野の「将来」概念についての論述へと進もう。

波多野における「将来」概念の本質は次のように表現される。「非存在へと去りたる存在(現在)を補ふべく新しき存在(現在)が来るのである」(IV, 289)　これはどういうことを意味しているのか。言い換えると次のようになる。現在は不断に過去へと、すなわち非存在へと過ぎ去ってしまう――しかし私たち自身が無あるいは非存在へと帰してしまうことはない――というのもそれは将来が、不断に、現在へと存在を供給するからである、と。

さて私たちは今や、ポイントとして指摘していた時間の流れる向きの論点へとたどり着いた。波多野の時間記述においては、将来から現在へと存在が供給され、それは過去へと過ぎ去っていくという連関が成立している。つまり時間は将来－現在－過去と流れるのである。これは独特な時間理解であると言える。

ところで、このような時間記述は、そしてこうした時間記述に基づいて定式化された時間構造は、「他者」の概念とどのように結びつくのであろうか。

ポイントは次である。それは、波多野が以上のような時間の定式化だけに満足することなく、さらに突

っ込んでそれの存在論的な構造を探求する点である。ちなみに、ここでの存在論とは「主体」「客体」「実在性」などのカテゴリーによって存在者の構造や連関を記述する営みと捉えておきたい。実際、波多野は、「以上の諸点を […] 更に立ち入って理解するため、今それを存在論的に主体の存在におけるそれの意義の観点より考察すれば」（IV, 291 強調は引用者）と宣言し、将来－現在－過去という時間の構造を主体の存在の観点から論及する。そして、まさにこの存在論的な観点に「他者」の概念も属すのである。

以下、若干長くなるが、それだけ引用する価値のある箇所を引いておきたい。

「主体は実在するものとして飽くまでも自己の存在を主張する。すなはち他者に対して自己の存在を維持し更に拡張しようとするのがそれの本質的傾向である。さてかくの如き傾向を有する実在者の直接性における交わりとして、自然的生は次の二重的性格を示す。主体はそれとの関係交渉に立つ他者が無くしては虚空に飛散消滅して壊滅に帰せねばならぬゆゑ、[…] 実在的他者は主体にとつて実在性及び生の内容の、従つてあらゆる存在の、維持者乃至供給者であるといわねばならぬ。しかしながら他面において、自然的生は実在者と実在者との直接的なる従つて外面的なる接触乃至衝突であるゆゑ、主体にとつてそれは他者よりの圧迫侵害であり、又存在の喪失である。自然的生を生きる限り主体は存在を獲得しつつしかも同時に喪失する。ここでは生ずるは滅ぶるであり来るは去るである」（IV, 292）

これを敷衍すれば次のようになる。主体にとっては、他者との関係・交渉こそが、存在を与えるものでありかつ同時に存在を奪うものである、と。このようにして波多野は、先の時間構造――すなわち将来が現在へと存在を供給しそれが非存在へと過ぎ去るという時間構造――をこのような主体－他者を契機とする存在論的構造に基づけるのである。

以上のように、波多野によれば、時間は本質的に他者関係と連関している。他者なしに時間はありえない。そして波多野がアウグスティヌスやベルクソンの時間論を「単純孤立状態にある主体」（IV, 294）のあり方に定位していると批判する点も興味深いと思われるが、この点の考察は後の論稿に委ねたい。

2

次にレヴィナスの議論に進む。波多野が綿密に解明したことをレヴィナスは『実存から実存者へ』と『時間と他者』において直感的に把捉し、直感的に提示する。『時間と他者』の序では次のように言われる。「この講演の目的は、時間は孤立した単独の主体に関わる事実ではなく、そうではなくて、時間はまさに主体と他者との関係そのものである、ということを明らかにすることである」（TA17, 三）[7] また『実存から実存者へ』においても「じっさい、単独の主体のうちにどうして時間が出現しうるだろうか。[…] 伝統的哲学――ベルクソンやハイデガーを含めて――は、主体に対してまったく外的な対象としての時間か、主体にまったく包摂されてしまう時間を構想するにとどまっていた。しかも、問題にされていたのはいつも単独の主体だった」（EE 159-160, 一九五‐一九六）と述べられている。

以上の引用から、レヴィナスが波多野と類似したことを述べていると気づかれたであろう。以下、より詳しくレヴィナスの議論を見てみよう。

ただし、あらかじめ指摘すると、レヴィナスの上記の著作には時間現象のまとまった記述がない。むしろ彼は主体構造の存在論的な分析の方途において時間の諸契機に触れる。すなわち、周知の《が(イリヤ)ある》、実詞化(イポスターズ)あるいは主人(メートル)といった彼独特の存在論的な概念によって主体のあり方を分析するその方途において

時間へと言及するわけである。他方で、本稿ではこれらの存在論的な概念に触れることはできない。したがって以下のレヴィナス論は断片的なものになるが、しかしながら時間と他者の連関についてはできるかぎり光を当てたいと思う。

レヴィナスは「死は決して現在ではない」（TA, 六〇）と言う。この言葉を聞いて思い出されるのがエピクロスである。ひとが生きている間には死は訪れず、死が訪れたときには、そのひとはすでに存在しない。生きる者にとって死は存在せず、また死んだ者はすでに存在しない。したがって、ひとは死に出会わない。出会うことのない死を恐れることは不合理極まりないことである。

しかしながらレヴィナスはこうした考えに反対する。「というのも、この教えは我々の、死との関係を抹消してしまうから」（ibid.）である。死は決して現在ではない――なるほどその通り。だがこれは私たちと死が無関係であることを意味しない。ここには、むしろ、我々と死との独特な関係性が成立している。それは何であろうか。レヴィナスは言う――「死は、それに抗して我々が何も為しえないような実在（réalité）を告げ知らせるもではない。というのも我々の力を超える実在はすでに光の世界の内に現れているからである」（TA62, 強調は引用者）。つまり、実在を告げ知らせるのは死にふさわしくない――というのも死はやはり現在ではなく実在ではないから。では「死」の核心とは何なのであろうか。それは「或る一定の瞬間においては、我々はもはや為しうることができない（nous ne *pouvons plus pouvoir*）」（TA, 六四）ということである。つまり死は、単純に不可能な実在の告知ではなく、そもそもの可能性の剥奪、可能性の不可能性、レヴィナスの言葉では、「投企を持つことの不可能性」（TA, 六五）なのである。

この事態をレヴィナスはさらにつっこんで分析する。そしてここに他者が登場する。つまり「このような死の接近は、我々が、絶対的に他なるものである何ものかと、他者性を備えている何ものかと関係しているということを示している」（TA, 六五）のである。

以上をまとめると次のようになる。レヴィナスは、一切の可能性の不可能性という主体の限界である死を通路として、主体と他者との関係を規定する。つまり、死という極端なシチュエーションの中に他者性は位置づけられる。その結果としてレヴィナスの他者性もまた、いわば、極端な他者性となる。

極端な他者性、あるいは他者性のこの極端さ――レヴィナスにとっては他者性の真性態――を彼は苦心して語る。「他者との関係は、宗教的共同体の牧歌的な調和のとれた関係でも、それを通して、われわれが他者の立場に身をおき、他者をわれわれの同胞として認識するところの共感でもなくて、われわれにとって外在的なものである。他者との関係は〈神秘〉との関係である」（TA, 六六）

そして、こうした他者――いわば絶対的他者――との関係にレヴィナスは、そもそもの時間の可能性を見る。レヴィナスは「将来（avenir）」を「捉えられないもの、我々に不意に襲いかかり、我々を捕らえるもの」（TA, 六七）と規定するが、このような「将来の外在性」は他者に由来する以外にない。かくしてレヴィナスは言う――「将来とは他者である。将来との関係、それは他者との関係そのものである」（ibid.）と。レヴィナスにおいても他者は時間――ここでは将来――と本質的に連関している。他者なしに時間はありえない。したがって次のように言われる。「単独の主体における時間について語ること、純粋に個人的な持続について語ることは、我々には不可能であるように思われる」（ibid.）

3

以上のように、波多野においても、レヴィナスにおいても、時間と他者は連関する。そして、このように言われてみれば、たしかに時間と他者は切り離せない仕方で連関しているように思われてくる。しかし、

もう少し疑い深くなってみよう。なぜ時間と他者は連関するのか。時間はなぜ他者を必要とするのか。時間が必要とする他者とは何か。他者を必要とする時間とはどのようなものか。

これについて、以下、レヴィナスのテキストと波多野のテキストのそれぞれから回答を引き出してみたい。それらが同じであるのか異なっているかについては別の場所に考察を委ねたいと思う。

時間は、そのどのような側面に関して、他者を必要とするのであろうか。主体あるいは《私》のみによって時間は成立しえないのであろうか。ここで、一秒前の私、現在の私、一秒後の私……などを考えてみよう。一瞬前の私はキーボードのあるキーをたたいていたが、その一瞬後の私は別のキーをたたいている。私の意識状態もまた一瞬前と一瞬後では異なる。すると次の点が指摘できる。それは、この、時間における《私》が、同一の主体でありつつ、それぞれ他なるものとして異なるという点である。この連関には注目すべき点がある。それは、《私》に、時間を通じて、他性が入り込んできているという点である。

こうした連関を考えるのは――その背景には、無名の《ある》（イリヤ）における《私》の実詞化（イポスターズ）という、ここでは論じられない、独特の存在論的背景があるのであるが――レヴィナスである。次の引用の抽象的な表現がそれである。「《私》の力学は現在の現前そのものの内に存する。つまり《私》の力学は現在の現前が含む要求の内に存する。この要求は、存在への固執を求めるものでも、[…] この現前の破壊――これは不可能だが――を求めるものでもなく、むしろその現前の内に結ばれた結び目を解くことを求める。つまり、現在の漸次消失が解きえない決定性を解くことを求めるのである。[…] 存在者の《人称性》とは、存在者が時間を必要としていることそれ自体である。存在者は、自身が他なるものとして再開する瞬間そのものにおける奇跡的な多産性として、時間を必要とするのである」（EE158-159）

つまり《私》が、他なるものとして再び、《私》として再開すること――これが時間なのである。ではこの時間における他性は何に由来するのであろうか。これについてレヴィナスは言う。「この他性を存在者は自分に付与することができない」（EE159）　つまり「他の瞬間の絶対的他性は […] 決定的に自分自身である主体の内には見出しえない」（EE160）　のである。では結局どこに由来するのであろうか。それは、予想通り、「この他性が私に訪れるのはただ他人からだけ」（ibid.）なのである。

つまり《私》だけでは時間は構成されえない。というのは《私》の内にはそれぞれの瞬間相互の他性を見出すことはできないからである。つまりレヴィナスにおいては、時間の内に他性を見出すことが、時間に他者を要請することの根拠になっているわけである。

では波多野の場合はどうであろうか。彼においてもう一度問うてみよう。時間が必要とする他者とはどのようなものか。

レヴィナスにおいてはいわば時間の他性――例えば《私》が次の瞬間に他なる《私》であること――に他者が関わったが、波多野においては《私》あるいは主体の存在に他者が関与する。波多野は言う、「主体の存在は他者への存在である。それは他者との関係交渉において成立ち又維持される」（IV, 291）。また、主体は「それの行くへを遮つてそれに抵抗を与へ緊張を促しつつそれの自己主張を誘発する実在者を俟つてはじめてそれの実在性は維持される」（IV, 292）。注目すべきは波多野が主体の存在を「他者への存在」として規定する点である。つまり主体は本質的に他者と関わる。その結果、主体に対する、他者による、存在の与奪は避けられる事態ではない。ここにおいて、主体に対して、時間が成立するのである。

以上まとめると、変化の贈与――レヴィナスにおいては《私》に他性を与えること、波多野においては主体の存在を与奪すること――こうした変化の贈与に関して時間は他者なしでは済まされないと言うことができる。

ただし別の側面もある。それは変化の間をつなぐ存在の維持という側面であり、伝統的には「連続創造」の概念と結びつけられて考察されている。レヴィナスと波多野の両人がともにこうした「連続創造（création continuée）」に言及し、その現象的意味や他者性との連関を考察していることは興味深い。

いずれにせよ、以上の論稿において時間と他者性との間の無視できない連関、あるいはこれらの連関の無視できなさが提示されたと思われる。

---

[1] ニュートン『自然哲学の数学的諸原理』、河辺六男訳、中央公論社、世界の名著 31、65 頁。

[2] この引用は『宗教哲学』（岩波書店、1935 年）から。『時と永遠』の序によれば「本書は旧著『宗教哲学』において展開されたる解決の試みに基づき、それの敷衍拡充を企図したもの」（IV, 281）である。

また本稿における波多野の引用は『波多野精一全集』（以下『全集』）から行い、巻数をローマ数字で、ページをアラビア数字で表す。

[3] 波多野は「時間」という表現より「時」という語を好むが、私は現在の慣例に従い「時間」という表現を用いる。

[4] この問題は波多野も言及する（IV, 296）。この問題の解明には「自然的時間性」と「文化的時間性」の区別が必要であり、本稿では扱われない。

[5] これはミゲル・デ・ウナムーノの詩であるが、ボルヘスの著書からの孫引きである（ボルヘス『永遠の歴史』土岐恒二訳、ちくま学芸文庫、10‐11 頁）。

[6] 「今日わが国の学界においては「将来」を無造作に「未来」と呼ぶことが殆ど流行といつてもよき程広く行はれている。これは自省すべき、場合によっては、断然改むべき不穏当なる習慣である。「将来」と「未来」とが実質的に一致する場合においても、前者は単純な積極的な正面より見ての言い表はしであり、後者は裏に廻はつて主として事柄の含みを見ようとする派生的態度の所産である」（IV, 290）

[7] レヴィナスの引用は次から。略号の後のアラビア数字は原典のページ数、漢数字は翻訳書のページ数を表す。
De l'existence à l'existant, 1947; 1990, J. Vrin. （EE と略記）（原田佳彦訳『時間と他者』法政大学出版局、一九八六年）
Le temp et l'autre, 1948; 1983, P. U. F. （TA と略記）（西谷修訳『実存から実存者へ』ちくま学芸文庫、二〇〇五年）